『ユリシーズ』と鞭打つ者

── 痛みにまつわるレオポルド・ブルームの功罪 *

南　谷　奉　良

は　じ　め　に

ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』（*Ulysses*, 1922）では，物語全体を通して数多くの鞭打ち行為が言及される[1)]。例えば女中が布団を叩く行為から連想される尻叩きやサーカスで酷使される少女に対する打擲，小枝や鞭を通じて動物を調教・制御する行為，後期ヴィクトリア朝に流行した鞭打ちポルノ文学，英国海軍やコンゴ自由国における笞刑などが挙げられるが，これらの打擲行為は第 15 挿話の幻想劇に至るまでに多種多様な打擲道具とともに重ね書きされていくなかで，支配と服従をめぐる関係性を規定する固有の身振りを読者に印象づけることになる。暴力とセクシュアリティが関わる話題であるだけに，『ユリシーズ』と鞭打ちに関連する主題については多くの研究がなされてきた。主たるところでは，（1）主人公レオポルド・ブルームのマゾヒズム願望とそのセクシュアリティについて（Shechner; Brown; Frost），（2）いわゆる “Dirty Letter” に記されたジョイス自身の性的嗜好とレオポルド・フォン・ザッハー=マゾッホからの影響について（T. Power; Siegel），（3）打擲の問題が物語に導入される『ルービー，舞台の花』（*Ruby, Pride of the Ring*）の原典探し（M. Power; Gryta），（4）ヴィクトリア朝における鞭打ちポルノ文学の系譜，性科学や社会純潔運動の文脈（Lamos; Levin; Mullin）からの文化史的考察などがなされてきた。このうちの幾つかは，19 世紀前半から 20 世紀初頭にかけての規制改革や反鞭打ち運動（anti-flagellation campaign）（Mullin 51–54）や，常に問題となる「懲罰としての鞭打ちと性技としての

＊　本稿は 2022 年 6 月 12 日（於大妻女子大学）に開催された日本ジェイムズ・ジョイス協会第 34 回研究大会での研究発表原稿を大幅に修正加筆したものである。尚，本研究は JSPS 科研費 20K12965 及び課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 JPJS00122674991 の助成を受けている。

1）本稿では『ユリシーズ』本文からの引用は Gabler 版（1986）に基づき，省略記号 *U* に続けて挿話番号と行数を記す。また，日本語の便宜上，樺の枝や杖，九尾の鞭，乗馬鞭などの様々な道具で行われていた打擲行為（flogging, caning, beating, whipping, lashing）を特に区別せず，「鞭打ち」（flagellation）と総称する。

鞭打ちの曖昧な関係」（Levin 129）に言及しているが，どちらかといえば性的快楽を優先して論じる傾向にある。また，他者の痛みに敏感な主人公ブルームが，鞭打ち行為に限っては痛みへの恐怖心や痛みを受けた人物の不快な情動体験を顕在化させることはない点については十分な精査がなされてこなかった。

『ユリシーズ』では「罰」（punishment）に「お仕置き」を，残酷さ（cruelty）に「女王様」（sadistic queen, dominatrix）に対するマゾヒズム的願望を読み込むブルームを通じて，鞭の痛みは快楽をもたらすものへと横滑りしていく。本稿ではまず“English Vice”（Ian Gibson）と呼ばれる英国に根付いた打擲文化と反鞭打ち運動の機運を論じた上で，その横滑りの理由を，『ユリシーズ』における punish（ment）と cruel（ty）という語の特殊な使用法のなかに見出す。そして，子供や女性，障害者，動物，社会的弱者の痛みに配慮する主人公が，不快な情動体験としての鞭打ちの痛みに限ってはその批判者とならず，むしろその意味を希薄にし，それを物語世界において後景化させてしまう功罪を明らかにしてみたい。

1. 反鞭打ち運動と“Disgusted One”としてのジョイス

一望監視施設「パノプティコン」を考案したジェレミー・ベンサムは『刑罰の合理的基準』（*The Rationale of Punishment*, 1830）のなかで，矯正・懲治目的の刑罰手段として「鞭打ち機械」（Flogging Machine）なるものを提案している。ベンサムは吊るし責めや股裂き木馬，水責めを英国の旧来的な残酷な刑罰と一蹴した上で，当時最も普及していた鞭打ちを唯一許容できる矯正用刑罰として推奨する。但し，刑務内で実践されている鞭打ちは道具の種類が不統一であり，刑罰執行者の機嫌や気まぐれによって回数や力加減が恣意的に変わるため，より合理的かつ経済的な方策として，特定の材質で作られた打擲具によって法に規定された回数やサイズで囚人を罰する機械を要求している（Bentham 82）。ベンサムの奇妙な機械は実際には発明されなかったものの，その考案自体が意味するように，鞭打ちの慣習は英国において長らく存続した懲罰機構の一部であった。

19 世紀前半から 20 世紀初頭にかけて，鞭打ちによる打擲行為は，奴隷制への批判やその残酷性・非人道性及び懲罰者，被懲罰者，それを目撃する者に道徳的頽落あるいは性的興奮をもたらすことへの危惧から公的制度の一部の範囲で廃止されていく一方で[2]，その実践の擁護者によって根強く支持された。1860 年代初頭にはイングランドの主要都市でパニック言説を引き起こしていた「首絞め強盗」（garroting）や暴行を

2）例えば，1817 年に泥酔して不品行を行った女性に対して三度にわたって路上で公開鞭打ちを行ったインバネスの事例を受けて，同年に女性に対する公開での鞭打ちを禁止，1820 年には the Whipping of Female Offenders Abolition Act を通じて，女性に対する公的／私的な場面での鞭打ちを禁止した（Scott 56, 137; Salt, *The Flogging Craze*, 15–16）。

伴った強盗に対する刑罰として鞭打ちが the Security Against Violence Act of 1863（通称 Garroting Act）を通じて適用され[3]，19 世紀末まで断続的な実施の増加を見せた（Collison 29–31）。1881 年には陸軍で鞭打ちの刑罰が廃止されるものの（Salt, *The Flogging Craze*, 17），海軍では 20 世紀初頭に至ってもその実践が報告されており，『ユリシーズ』第 12 挿話の「市民」によって *Hamlet* を引用しながら「臀部」と「違反」［breech と breach を掛けて］皮肉られているように（“—'Tis a custom more honoured in the breach than in the observance.” *U* 12.1342），悪名高い英国の「慣習」として長らく存続した。

鞭打ちの制度的慣習は本国内のみにとどまらず，アイルランドやその他の支配地域にも輸出された。例えば，「あらゆる形式の残酷な行為」に反対する方針をもつ『人道主義同盟』（Humanitarian League）[4] を創設した社会改良家ヘンリー・スティーヴン・シェイクスピア・ソルト（Henry Stephen Shakespeare Salt, 1851–1939）は —— 同盟の一員でもあったジョージ・バーナード・ショーが名付けた国家単位で起こっている「特殊な想像力障害」としての「鞭打ち偏執病」（Flagellomania）から着想を得た —— 著書 *The Flogging Craze*（1916）のなかでこの鞭打ち文化の輸出を例証して，大英帝国の植民地の一部には本国よりも半世紀は文明化が遅れている国があると指摘する。そして当時広く読まれていたと思われるハロルド・フィールディング・ホール（Harold Fielding Hall）のビルマでの滞在観察録『ある民族の魂』（*The Soul of a People*, 1898［1st, 2nd ed］; 1899［3rd］; 1902［4th］）に対する反証として，現地での鞭打ちの年間実施数を挙げている —— “That in Burma there should have been as many as 2,158 floggings in 1911, and 2,205 in 1912, is *not a pleasant matter of thought* for readers of *The Soul of a People*”（13; 強調は筆者による）。

この批判的記述を読んで「心地よくない」気分を覚えるのは，『デイリー・エクスプレス』紙上で 1903 年にまさしく「心地よい哲学」（“The Suave Philosophy”）というタイトルで書評を寄せ，“Mr Hall has written a most pleasing book”（Joyce, *Occasional, Critical, and Political Writing*, 68）と評したジョイス自身でもあっただろう。ジョイスは冒険や肉食，狩猟，闘争によって特徴づけられる「われわれの文明」と対比しながら，ビルマの人々がもつ「精神の平安にもとづいた幸福」，怒りや無礼が非難され，使役される家畜が憐れみと寛容に値する存在として扱われる現地の暮らし，非暴力に特徴づけられる仏教文化を称賛しているが，ホールのオリエンタリズムによって理想化

3）但し首絞め強盗対策としての鞭打ち罪の抑止効果については疑問視されている（Salt, *The Flogging Craze*, 105–11）。この特殊な犯罪用語については，第 16 挿話の冒頭で深夜に帰宅するブルームが強盗の恐怖を語る場面でも言及されている（“. . . they might be hanging about there or simply marauders ready to decamp with whatever boodle they could in one fell swoop at a moment's notice, your money or your life, . . . gagged and garrotted.” *U* 16.124–27）。

4）人道主義同盟の詳細な活動については Weinbren を参照のこと。

された安寧の地ビルマもまた，英領インド統治下にあって English Vice の慣習が導入されていたのである[5)]。

書評を書いた 4 年後，大英帝国の支配地域に輸出された「心地よくない事実」としての鞭打ちの残酷な実態について，ジョイスはより批判的になっていただろう。1907 年にトリエステで行った講演「聖人と賢者の島アイルランド」（“Ireland, Island of Saints and Sages”）のなかで，ジョイスはチャールズ・スチュアート・パーネル（Charles Stewart Parnell, 1846–1891）が好んで語ったとされる逸話を伝記から取り上げ，英国の暴力行為がいかに「残酷」であるかを強調している。

> She［England］was as cruel as she was cunning: her weapons were, and are, the battering-ram, the club and the noose. If Parnell was a thorn in the side of the English, it was because, in his boyhood in Wicklow, he heard the tale of the English ferocity from his nurse. A tale, which he himself used to recount, told of a present who had infringed against the Penal Laws and who, by order of the colonel, was taken, stripped, tied to a carriage and whipped by the troops. The whipping was, by order of the colonel, administered to his stomach in such a way that the unfortunate man died in atrocious agony, his intestines spilling out on the road.（Joyce, *Occasional, Critical, and Political Writing*, 119）

刑罰法に違反して鞭を打たれた農夫が激しい苦痛のうちに死んだとき，腹部が裂けて腸が路上に溢れでていたという記述は，もとになったパーネルの伝記（1898）の “how the man shrieked in his agony and cried for mercy, . . . until his lacerated body fell, bleeding and torn, lifeless to the ground”（O’Brien 53–54）のそれをより凄惨に演出しており，英国の残酷さを際立たせていることがわかる。パーネルの逸話は 1798 年のアイルランド反乱時の出来事だが，そのような古い話題を頻繁に語り口にしていたことが引き合いに出されるのも，パーネルが 1881 年の陸軍での鞭打ち廃止に貢献した経緯が，ジョイスが参照した伝記のなかで詳細に記録されているためである（O’Brien 186–91）。

上記は 19 世紀後半の反鞭打ち運動の文脈を伝えるものだが，トリエステでの講演があった 1907 年頃には，英国海軍で根強く残っている鞭打ちの刑罰の是非が大きな論争になっていた。暴力が主題の一つになる『ユリシーズ』第 12 挿話でもその笞刑の話題

5）1922 年から 6 年間にわたってインド帝国警察官としてビルマに赴任していたジョージ・オーウェルも「象を撃つ」（“Shooting an Elephant,” 1936）のなかで，ビルマ人の身体への鞭打ちの痕跡を記録している（“the scarred buttocks of the men who had been flogged with bamboos,” 30）。

が導入され，“*Disgusted One*”という匿名の人物によって投書されたポーツマスでの海軍士官訓練船で行われた鞭打ちの問題を「市民」が取り上げている（“—I'll tell you what about it, says the citizen. Hell upon earth it is. Read the revelations that's going on in the papers about flogging on the training ships at Portsmouth. A fellow writes that calls himself *Disgusted One*.” *U* 12.1330–32）。注釈者たちは，この“*Disgusted One*”のモデルとして，土地戦争や自治法案で揺れる 1887 年から 1918 年にわたってアイルランドの下院議員を務めていた国会議員ジョン・ゴードン・スウィフト・マクニール（John Gordon Swift MacNeill, 1846–1926）を指摘し[6]，合わせてマクニールに触発されたバーナード・ショーが『タイムズ』紙に寄せた 1904 年 6 月 14 日の投書を挙げてきた（Gifford 357; Slote, et. al 632）。

実際，1904 年 8 月には時の首相バルフォアに対する議会質疑のなかでマクニール議員がこの問題に触れている。バルフォアが海軍での鞭打ちの実態を認めていないように，この刑罰は巧妙に隠蔽される社会問題であった。

BIRCHING IN THE NAVY

> Mr. MACNEILL asked the First Lord of the Treasury why the flogging of men with the cat-o' nine-tails, and of boys and youths under 18 with birches, weighing nine ounces, and canes, was still allowable and practiced in the Navy, although *the system had been long abolished in the Army;* and whether any steps would be taken for the abolition in the senior branch of the King's service.
>
> Mr. BALFOUR.—There is no flogging of men in the Navy, and there is no intention of abolishing the punishment of birching and caning of boys.（“Birching in the Navy,” *London Evening Standard*, 5 Aug 1904, p. 6; 強調は筆者による）

記事内で言及されている 1881 年陸軍での鞭打ちの廃止とパーネルの関係についてはすでに述べた通りだが，このことに関連して興味深いのが，1919 年 6 月もしくは 7 月に成立したとされる第 12 挿話の最初期の草稿 V.A.8 内の記述である。この草稿には，本節冒頭で引用した 1922 年刊行版とは異なる，注目すべき 2 つの固有名 —— 反鞭打ち運動に関わった二人の人物 —— が確認できるのである。

> —The Navy regulations about flogging [on the trainingships at Portsmouth] says

6）マクニール議員は海軍のみならず，刑務所の囚人に対する鞭打ちや，未成年に対する残酷な体罰，動物虐待を批判し続けたことに加えて（南谷，2022, 139–40; Salt, *Seventy Years among Savages*, 138），パーネルの熱心な信奉者であり，その政治活動に積極的に貢献しようとしていた人物であった（O'Brien 239）。

—. Didn't you read Bernard Shaw's letter?
—I thought that was abolished by Parnell.
—You thought wrong then, says— . . . . (Herring 172)

"*Disgusted One*" には "Bernard Shaw" が，また鞭打ちの廃止に貢献した人物として "Parnell" の名が言及されていた[7]。すでに指摘したように，ショーは 1904 年時に鞭打ちに関して多くの新聞紙上での投書を行っていた。*A Treatise on Parents and Children* (1910) の序文では、「鞭の支配下で」("Under the Whip") という見出しで英国の習慣化した鞭打ち行為に警鐘を鳴らし，その「鞭打ち偏執病」を痛烈に批判している (Shaw 79)。「市民」のモデル "Michael Cusack" の名前が第 12 挿話で消えたことは有名だが，合わせてパーネルの名が消され，またショーが匿名の投稿者に変えられたことは，「名無し」を登場させる同挿話の特徴を強める工夫を裏書きしている。おそらくジョイスはこの改稿を通じて，同挿話の語り手「俺」とはまた別の匿名の存在，あるいはまた別の市民の存在を登場させることで，特定の個人だけではなく，反鞭打ち運動の機運とそれに共鳴していた不特定多数の人々の存在を記録しようとしたのだろう。こうした反鞭打ち運動の歴史的文脈において，ジョイスもまた，トリエステの聴衆に "Can the back of a slave forget the rod?" (Joyce, *Occasional, Critical, and Political Writing*, 121) と問いかけるとき，その残酷な実践を批判する "*Disgusted One*" の一人であったことを次節を前に強調しておきたい。

2. "Aroused One" としてのブルーム (1) —— "Punish (ment)" の分裂

鞭打ちや体罰，暴力のモチーフについては，『ダブリナーズ』では，「遭遇」("An Encounter") のバトラー神父や原っぱで出会う老人，「イーブリン」("Eveline") の父親，「写し」("Counterparts") のファリントンを通じて，ダブリンの家庭や学校の暗部を映すように描かれていたのに対し (南谷，2021)，『若き日の芸術家の肖像』では，幼い主人公スティーヴン・デダラスを通じて，その言語獲得と感覚世界と分かちがたく結びついている鞭打ちの痛みが描かれていた。一方『ユリシーズ』では，英国海軍やコンゴ自由国での問題など社会的な時事問題として取り上げることはあるものの，鞭打ちを受けた被害者の痛みが主観的に描かれたり想像されたりすることはなく，むしろブルームが期待する「お仕置き」の願望に変換されてしまう。本節と次節ではそ

7) 1974–75 年に *JJQ* 誌上で V.A.8 の草稿全文を初めて公開した Schwartzman は "Portsmouth" を "Dartmouth" と，"Bernard Shaw" を "Bernard Sland" と書き起こしているが (98–99)，1977 年刊行の *Joyce's Notes and Early Drafts for Ulysses: Selections from the Buffalo Collection* 及び *James Joyce Digital Archive* 上では，"Portsmouth" 及び "Bernard Shaw" と転写されている (https://www.jjda.ie/main/JJDA/U/ulex/n/n1G1d.htm)。Schwartzman は 1977 年の論文で転写ミスを認めている (485)。

の理由を，主人公ブルームの性癖ゆえに生じている，punish(ment) と cruel(ty) という語の特殊な使用法に見出してみたい。

第 4 挿話，ブルームが食肉店に買い物にでかけ，隣の家の女中を店内で見かけたとき，彼は女中の逞しい腕から，普段目にしているカーペットを彼女が叩く様を想像する（“Whacking a carpet on the clothesline. She does whack it, by George. The way her crooked skirt swings at each whack.” *U* 4.150–51）。道具こそ直接描かれていないが，その記述には家庭や学校で子供に対する体罰に転用されていたことで知られる carpet beater が前提とされている。その後ブルームは，かつて保険計理人として関わっていた家畜市場で枝鞭（“unpeeled switches in their hands”）によって追い立てられていた家畜の尻を思い出しながら，新聞紙の切れ端越しに女中の肉感に富む臀部を窃視し，whack という打擲のリズムを想像的に聞いている（*U* 4.159–64）。これが『ユリシーズ』における最初の打擲具への言及となり，以降ブルームは手にもたれた打擲具のイメージを次々に重ねながら，「罰」に性的快楽を含意させていく。

第 5 挿話にてオール・ハローズ教会で聖体拝領を通じてカトリックの教義システムを考えるブルームは，“Punish me, please. Great weapon in their hands”（*U* 5.426）と心のなかで呟く。“Punish me, please” は文字通りには想像された告解者の言葉を表わすが，同時に彼のマゾヒズム願望の投影でもあり（Lowe-Evans 572），直前に読んでいた文通相手マーサからの手紙の “I will punish you”（*U* 5.251–52）に対するブルームの返事ともなっている。同様に，司祭の手にもたれる “Great weapon” には，「女王様」の資質が投影される女性登場人物たちがもちうる打擲具を重ねているのだろう。そのことは，のちにオーモンド・バーで返事を書く際に，女中とマーサを重ねて “You punish me? Crooked skirt swinging, whack by”（*U* 11.891）と考えるその思考にも見て取れる。次節で論じるサーカス団長の鞭や第 4 挿話の最後でブルームが座る「懲罰椅子」(cuckstool）としての便座（*U* 4.300）と合わせ，“carpet beater”，“unpeeled switches”，“carriagewhip”，“Great weapon” は，いずれブルームの身体に性的打擲が加えられる原型的なイメージを用意することになる。

性的快楽としての鞭打ちへの関心は，ブルームの読む行為にも見出すことができる。例えば第 10 挿話で古本を漁っているときには，レオポルド・フォン・ザッハー=マゾッホの著作を見つけたことで，店主から（birch を含んでいるように，鞭打ち小説を書く匿名の著者らに汎用的に使用されていた名前）James Lovebirch の *Fair Tyrant* と，*Sweets of Sin* の 2 冊を薦められている（*U* 10.601–02, 606）。また第 17 挿話では，ブルームの鍵付きの引き出しのなかに，女学校における体罰に関する記事の切り抜きが隠されていることが明らかにされる（“a press cutting from an English weekly periodical *Modern Society*, subject corporal chastisement in girls' schools” *U* 17.1801–02）。Brockman は 20 世紀初頭の未成年の体罰論争との関連を指摘した上で，この切り抜き記事が第 12 挿話の酒場で「市民」によって話題とされる英国海軍での体罰問題に結び

つけている（186–87）。確かにブルームが読む週刊誌と「市民」が読む新聞は同じ体罰問題を扱っている。しかし，「市民」が英国の暴力として攻撃する体罰（corporal punishment）と，性的快楽を読み込むブルームの体罰（corporal chastisement）とでは，語の役割が大きく異なっていることに注意しなければならない。上記の例のいずれにおいても，人道主義同盟のメンバーやジョイスが敵視していたような残酷な痛みを批判する要素は含まれておらず，ブルームのマゾヒズム願望と快楽志向の連関が読み取れるのみである。この主人公は，こと鞭打ちの話題に触れたときには“Disgusted One”とはならず，不快な情動体験としての痛みの前景化を拒むのである。

3. “Aroused One”としてのブルーム（2）──“Cruel(ty)”の分裂

ブルームが「罰」（punishment）に「お仕置き」を読み込むのと同様，ある言葉の表面的な意味に彼固有の性癖を付加するもう一つの言葉として，cruel(ty）がある。ブルームはそのことを，猫の執念深く，残酷な性質について言及するときに密かに開陳している（“Vindictive too. Cruel. Her nature. Curious mice never squeal. Seem to like it.” *U* 4.27–28）。幾度も指摘されてきたように，猫に捕まえられた鼠が明確な従属・支配関係のなかで蹂躙されることを楽しんでいるという解釈には，ブルーム夫妻の関係が投影されているのだろう。但し猫と鼠の関係がそのまま夫婦関係に連想的に移行しているのではなく，より直接的には，『毛皮のヴィーナス』（*Venus in Furs*, 1870）のゼヴェリーンとワンダの関係，特に下記の一節を介して，自分とモリーの関係を投影していると見るべきである。

> If only she [Wanda] would use the whip again. There is something uncanny in the kindness with which she treats me. *I* [Severin] *seem like a little captive mouse with which a beautiful cat prettily plays*. She is ready at any moment to tear it to pieces, and my heart of a mouse threatens to burst.（Masoch 59; 強調は筆者による）

ブルームの“Cruel. Her nature”という心のつぶやきは，鼠を弄ぶ猫の残酷な習性[8]を語るだけでなく，ブルームがブリーン夫人に向かって言う“you cruel naughty creature”（*U* 15.559）に見られる cruel や naughty に，語義として接近している。重要なことに，これが『ユリシーズ』で初めて cruel(ty）という語の意味を分裂させ，二つの相反する文脈に展開させる起点となる。「残酷」という語は同じ挿話のなかで，ブルームがベッドの下に落ちていた『ルービー，舞台の花』のなかの馬車鞭をもった

8）鼠捕りのために猫を飼っているブルームは（“Give her too much meat she won't mouse.” *U* 4.276），実際にそのような光景を見たことがあるのだろう。鼠をいたぶる猫の残酷さについては，飼い猫に関する逸話や言説を蒐集した Vechten 31 を参照のこと。

サーカスの団長と半裸の少女を描いた挿絵とキャプションを見たときに現われる（“*The monster Maffei desisted and flung his victim from him with an oath*. Cruelty behind it all. Doped animals.” *U* 4.349）。この著作をめぐる記述は，エイミー・リード（Amye Reade）の *Ruby. A Novel. Founded on the Life of a Circus Girl*（1889）の初版[9]及びヘンリー・T・ジョンソン（Henry T. Johnson）の *The Pride of the Ring*（1902）といった世紀転換期のサーカス物語を利用していることが判明しており（M. Power; Gryta），上記の引用で言及される箇所と挿絵は，リードの小説においてサーカス団長の酷使によりルービーが気絶している場面に依拠している。原作ではルービーが死んでしまったと考えている友人ヴィクトリア・メルトンがエンリコ団長の残酷さを告発し，“I'll tell everyone, everyone, how wicked—how cruel you are!”（347）という言葉を放ったがために，無理やり服を脱がされ，鞭で打擲される場面である。

> “Don't ! don't ! please don't,” cried Vic.
>
> He [Signor Enrico] heeded neither her struggles nor her pleadings, but continued to remove her things. Vic screamed.
>
> With a wrench at her clothes, the infuriated brute literally tore them from her back, and throwing her across the end of the sofa, brought his whip upon her bare body with a force that made her writhe in agony; then a piercing, heart-rending shriek rent the air.（Reade 349）

Levin が指摘するように，リードの小説は当時の年季奉公人の未成年を酷使するサーカス産業を批判する意図があったにもかかわらず，後期ヴィクトリア朝のサーカス物語群のなかで類型化していたサドマゾの主題やフェティシズム描写を含んでいた。確かに，脅迫，抵抗と降伏，嘆願のモチーフ，また官能的に描かれた衣服や拘束具，鞭打ち痕等によって特徴づけられる 19 世紀の鞭打ちポルノ文学を踏襲してしまったその描写は（Levin 128–32; Marcus 256），結果としてその趣味の愛好家たちの垂涎を誘ったことだろう（“For a masochist like Bloom, the beating scene would therefore be quite arousing”［Levin 136］）。ブルームのような読者は，“Cruelty behind it all”（*U* 4. 349）を性的に嗅ぎつけて，「シーツの後ろ」（“Sheet kindly lent,” *U* 4.348）や「カーテンの後ろ」（“A woman's voice behind the dingy curtain.” *U* 10.605）[10] を窃視しようとする

9）1890 年の改訂版では，*How Girls Are Trained for Circus Life. Founded on Fact* とタイトルが改められるに加えて，当時の体罰論争ゆえにセンセーショナルな話題であることを出版社が考慮して，挿絵と団長の痛罵の言葉の幾つかが削除された（Levin 133）。

10）ブルームは古本屋の店の奥から女性の声が聞こえてきたように勘違いしているが，それは同じ性的嗜好をもっている店主と関係を結んでいる女性を期待したためと考えることができる。

からである。

再び引用すれば，“*The monster Maffei desisted and flung his victim from him with an oath.* Cruelty behind it all. Doped animals.”（*U* 4.349）にみる，サーカスで酷使される少女から舞台裏の残酷さへ，そしてサーカスのために酷使される動物へと連想を働かせるブルームの思考は，以降の挿話で展開される「性技としての鞭打ち」と「懲罰としての鞭打ち」との二つの意味の分岐を予告するものであり，心地よい痛みを欲するマゾヒズム的願望と不快な痛みを嫌悪する精神の二つを同居させている。ここでの“Cruelty”という語は，辞書学者 Susie Dent の言葉を借りれば，二つの意味の方向へと顔を向けるある種の“Janus-Word”（contronym）として機能しながら，Aroused One ／ Disgusted One としてのブルームの二面性を露わにしており，語の役割として快楽を求めるマゾヒズム願望に向きながら，一方では動物への残虐な行為にも顔を向ける両義性を有している。ブルームの「優しさ」は“Cruelty”に向けられた一つの顔に過ぎないのである。

第 15 挿話の幻想劇では，先行する挿話に登場した様々な人物と打擲具がブルームに「お仕置き」をするために登場する。そのマゾヒストは実際，その場に登場する「すべての人々に」に向けて，血が出ない程よい痛みでの打擲を要求している（“All these people. I meant only the spanking idea. A warm tingling glow without effusion. Refined birching to stimulate the circulation.” *U* 15.1995–96）。同挿話には，悲壮で痛ましい暴力，流血を伴う残酷な鞭打ちの痛みは存在しない（鞭打ちにトラウマをもつスティーヴンの体験すらもコミカルな演出のなかで消費されてしまっている）。『ユリシーズ』の各所には冗談やユーモアを交えて語ることのできないような鞭打ちの痛みが歴史的痕跡として記録されているが，「罪の甘い歓び」に耽る“Aroused One”としてのブルーム自身はそれに向き合うことはなく，むしろそうした痛みの意味世界を後景化し，希薄にする役割を担っている。もちろん，それがいわゆる彼が過去に犯した罪の意識への罰として演じられているのだとしても，マゾヒズム的願望がいつか実現されることをもとより前提とし，他者に痛みを与えた罪の意識によって得られるだろう「お仕置き」の痛みを自身の快楽へと誘導するのであれば，それはどこまでも身勝手な，サディスティックなマゾヒズムである。

終　わ　り　に

Joseph Valente による 2021 年の論文「ブルームよ，お前もか」（“Et Tu, Bloom: or, #MeToo, Male Masochism, and Sexual Ethics in *Ulysses*”）で，ブルームの女性に対するハラスメント行為を批判したように，不快な情動体験としての鞭打ちの痛みを見ようとしない彼を批判することはできるだろうか。「いい人」として造形され（Budgen 17），子供や女性，障害者，動物，社会的弱者の苦しみに配慮するブルームが物語に痛みの問題系を導入する役割を担う一方で，鞭打ちの痛みに限ってはそれを追放してし

まうのであれば，それは彼の功罪と言ってよいだろう。第 12 挿話で，英国海軍の鞭打ちの話の続きから，神（God）の代わりに全能なる鞭（rod）を信じる英国を批判する市民に対してブルームが抗弁するとき，彼は残酷な鞭打ちの痛みに正面から向き合おうとはしない。

> —And the tragedy of it is, says the citizen, they believe it. The unfortunate yahoos believe it.
> They believe in rod, the scourger almighty, creator of hell upon earth, ...
> —*But*, says Bloom, isn't discipline the same everywhere. I mean wouldn't it be the same here if you put force against force?（*U* 12.1333–61; 省略と強調は筆者による）

なぜここでブルームは鞭を打たれた人々に同情を表明するのではなく，“But” と言わなければならないのだろうか。どうして彼は略奪と侮辱にさらされ，モロッコの家畜や奴隷のように扱われてきたユダヤ系の人々の扱いを糾弾し，ダブリン社会で疎外されている自身の苦痛に話を転じなければならなかったのだろうか（*U* 12.1470–72）。「市民」の偏狭なナショナリズムを攻撃し，周縁化される人々の痛みを掬い取り，憎しみではなく愛の重要性を唱えるためだけだろうか。その “But” にはおそらく，鞭打ちの cruelty と punishment に性的快楽を見出してきたブルームゆえの否認が隠されている。仮にそこで彼が「市民」に同意して同情を示してしまえば，流血を伴う残酷な鞭打ちも彼のマゾヒズム幻想を刺激する要素になる危うさに彼は気づいているのだろう。

実際，上記のシーンに続いてブルームが一時的に出て行ったあと，バーニー・キアナンの酒場では，象牙と天然ゴムを採取と目的としてレオポルド二世に私有地化されたコンゴ自由国の話題が言及される（“Raping the women and girls and flogging the natives on the belly to squeeze all the red rubber they can out of them.” *U* 12.1548–49）。この場面にブルームが引き続き居合わせたとしたら，彼がそこでいったい何を言うのかを私たちは想像する必要がある。手首を切られる人々や，レイプされる女性，天然ゴム状の血に染まった腸が鞭によって引きずり出される現実を前に，ブルームもまたジョイスと同じように “*Disgusted One*” として，残酷な鞭打ちに批判の言葉を述べることができるのだろうか。

私たちはいつまでブルームを「いい人」としてだけ扱うのだろうか。それに十分に答えることができなかった拙論（南谷，2022）に批判を向けるためにも，その問いを本稿の最後に置いておきたい。

引用・参考文献

Bentham, Jeremy. “Simple Afflictive Punishments.” *The Rationale of Punishment*. Robert Heward, 1830, pp. 76–81.

Brockman, William S. "'Clio's Clippings': From Newspaper to Press Cutting." *European Joyce Studies*, vol. 26, Publishing in Joyce's *Ulysses*: Newspapers, Advertising and Printing, 2018, pp. 175–91.

Brown, Richard. *James Joyce and Sexuality*. Cambridge UP, 1988.

Budgen, Frank. *James Joyce and the Making of* Ulysses *and Other Writings*. Oxford UP, 1972.

Collison, Joseph. *Facts about Flogging*. A. C. Fifield, 1905.

Dent, Susie. *Word Perfect: Etymological Entertainment for Every Day of the Year*. John Murray, 2023.

Frost, Laura. "'With This Ring I Thee Own': Masochism and Social Reform in *Ulysses*." *Sex Positives?: The Cultural Politics of Dissident Sexualities*. Edited by Thomas Foster, et. al. New York UP, 1997, pp. 225–64.

Gibson, Ian. *The English Vice: Beating, Sex and Shame in Victorian England and After*. Duckworth, 1978.

Gifford, Don. *Ulysses Annotated: Notes for James Joyce's* Ulysses. Rev. ed. U of California P, 2008.

Gryta, Caroline Nobile. "Who Is Signor Maffei? And Has *Ruby: The Pride of the Ring* Really Been Located?" *James Joyce Quarterly*, vol. 21, no. 4, summer 1984, pp. 321–28.

Herring, Philip F., editor. *Joyce's Notes and Early Drafts for* Ulysses: *Selections from the Buffalo Collection*. UP of Virginia, 1977.

Joyce, James. *Ulysses*. Edited by Hans Walter Gabler, Random House, 1986.

————. *Occasional, Critical, and Political Writing*. Edited by Kevin Barry, Oxford UP, 2000.

Lamos, Colleen. "James Joyce and the English Vice." *Novel: A Forum on Fiction*, vol. 29, no. 1, Joyce and the Police, autumn 1995, pp. 19–31.

Levin, Jennifer Burns. "'Ruby pride of the on the floor naked': Fetishizing the Circus Girl in Joyce's *Ulysses*." *Joyce Studies Annual*, 2009, pp.125–58.

Lowe-Evans, Mary. "Sex and Confession in the Joyce Canon: Some Historical Parallels." *Journal of Modern Literature*, vol. 16, no. 4, spring 1990, pp. 563–76.

Marcus, Steven. *The Other Victorians: A Study of Sexuality and Pornography in Mid-Nineteenth-Century England*. Basic Books, 1964.

Mullin, Katherine. *James Joyce, Sexuality and Social Purity*. Cambridge UP, 2003.

Power, Mary. "The Discovery of Ruby." *James Joyce Quarterly*, vol. 18, no. 2, winter 1981, pp. 115–21.

Power, Tristan. "Married His Cook to Massach." *Joyce Studies Annual*, 2017, pp. 135–62.

O'Brien, R. Barry. *The Life of Charles Stewart Parnell 1846-1891*. Vol. 1. Harper and Brothers, 1898.

Orwell, George. "Shooting an Elephant." *Facing Unpleasant Facts: Narrative Essays*. Mariner Books, 2009, pp. 29–37.

Reade, Amye. *Ruby. A Novel: Founded upon the Life of a Circus Girl*. Author's Co-operative Publishing Co., 1889.

Sacher-Masoch, Leopold von. *Venus in Furs*. Translated by Fernanda Savage, N.p.: Private printing, 1921.

Salt, Henry Stephen. *The Flogging Craze; A Statement of the Case Against Corporal Punishment*. George Allen and Unwin, 1916.

————. *Seventy Years among Savages*. George Allen and Unwin, 1921.

Schwarzman, Myron. "The V.A.8 Copybook: An Early Draft of the 'Cyclops' Chapter of *Ulysses* with Notes on Its Development." *James Joyce Quarterly*, vol. 12, no. 1/2, Textual Studies Issue, fall 1974-winter 1975, pp. 64-122.

————. "Joyce and Bernard Shaw: with an Unpublished Letter from Joyce to John Quinn." *James Joyce Quarterly*, vol. 14, no. 4, summer 1977, pp. 483-85.

Scott, George. *The History of Corporal Punishment: A Survey of Flagellation in Its Historical, Anthropological and Sociological Aspects*. Routledge, 2010.

Shaw. George Bernard. *Treatise on Parents and Children*, 1910.

Shechner, Mark. *Joyce in Nighttown: A Psychoanalytic Inquiry into* Ulysses. U of California P, 1974.

Siegel, Carol. "'Venus Metempsychosis' and *Venus in Furs*: Masochism and Fertility in *Ulysses*." *Twentieth Century Literature*, vol. 33, no. 2, summer, 1987, pp. 179-95.

Slote, Sam, et. al. *Annotations to James Joyce's* Ulysses. Oxford UP, 2022.

Valente, Joseph. "Et Tu, Bloom: or, #MeToo, Male Masochism, and Sexual Ethics in Ulysses." *Joyce Studies Annual*, 2021, pp. 11-47.

Vechten, Carl Van. *The Tiger in the House*. Alfred A. Knopf, 1920.

Weinbren, Dan. "Against All Cruelty: The Humanitarian League, 1891-1919." *History Workshop*, no. 38, 1994, pp. 86-105.

南谷奉良「『ユリシーズ』と動物の痛み ── レオポルド・ブルームの優しさについて」, 『ジョイスの挑戦』金井嘉彦・吉川信・横内一雄編著, 言叢社, 2022, pp. 135-58.

————.「ジョイスと鞭打つ者 ── 「遭遇」における痛みの反復と循環」, *Joycean Japan* 32 号, 2021, pp. 6-17.